


2.足袋産業(明治)の発展と足袋蔵の建設

近代に入ると足袋は大衆化して需要が拡大し、行田の足袋商人は東北地方や北海道に直接赴いてさらに販路を広げると共に、軍需用の足袋の生産にも携わり、他の産地を圧倒してゆきます。足袋づくりに は作業工程ごとに専用の特殊マシンが導入され、 日露戦争の好景 気を契機に 足袋工場建設ブームが起こって、敷地の裏庭に 工場が建てられ てゆきます。 生産量が増えると、出荷が本格化する秋口ま で製品を保管し て置く倉庫として足袋蔵が必要になり、既存の土蔵の転用と 共に、敷地の一番奥に足袋蔵が 数多く建てられるようになりました。 石田三成の水攻めに耐えた忍城の城下町であった行田は、近世前半に城と 城下町の整備が行われ、間口の広さに応じて各家に税が課せられたので、間口が狭く奥行きが長い短冊型の敷地が通り沿いに並ぶ町割りが形成されていました。近世の行田は、鴻巣・吹上から館林へと続く館林道・日光脇往還の宿場でもあったので、馬の世話を行なう裏庭とそこに通じる路地が家々の間に設けられていましたが、近代になって馬の世話の必要がなくなり、遊休化した裏庭に足袋工場と足袋蔵が建てられていったのです。こうして短冊形の敷地に、北風に備えて北西方向のみを塗り壁にしたり、北西方向の窓を極端に少なくしたりと言った防火・防寒対策を施した店舗・住宅、接客用の中庭、工場、足袋蔵、火除けを願う屋敷稲荷が表から列状に並ぶ、足袋商店特有の建物配置が形作られました。-

-----明治時代の足袋-----

城下町から足袋のまちへ

足袋屋は、江戸時代末の天保年間には 27 軒を数え、行田町で一番店数の多い商売になっていましたが、明治維新後、廃藩置県が行われると、武士から足袋商人に転身する者が多く現われ、その数はますます増えてゆきました。東北地方に鉄道が伸び、北海道の開拓が始まると、行田が足袋の産地として最も北にあったことあって、多くの足袋屋が販路を東北・北海道に広げて成功を収めました。「呉服商山田清兵衛商店」の明治 16 年(1883)の店蔵「十万石ふくさや行田本店店舗」。また、西南戦争で軍事用の足袋（鷹匠足袋）を受注し軍需品受注の足掛かりを掴みました。明治 20 年代には足袋づくりにマシンが導入させ始め、工場での足袋生産が行われるようになるなど、機械化・近代化が始まり、生産量は飛躍的に増加してゆきました。明治 23 年頃までは足袋生産は“家内工業”、そして、マシンの導入により一層発展しました。



※手工業期(明和年代から明治 20 年頃まで) 明治の足袋は明治になって下級武士の妻女が生活の糧に貸仕事をしたとされています。

明治時代の足袋蔵エピソード①

明治 19 年には橋本喜助商店が、現在の行田郵便局の場所に行田で初めての足袋工場を設立し、明治 23 年ごろからミシンを導入するなど、足袋づくりの近代化が始まりました。橋本喜助は明治 19 年(1886)に酒蔵を買収し、内部を改造して原料の整理から製造、製品検査、荷造りまでできる「橋本足袋工場」を設立した。

機械が導入され、小さいながらもなりました。さらに明治 25



そして、明治 23 年頃になると足袋の裁縫に機械工場生産様式をとると生産高も増えるように年頃にドイツの「八方ミシン」が導入されると

行田の足袋産業が急激に発展しました。古い手工業時代から、新しい家内工業への幕上げです。

明治時代の足袋蔵エピソード②

それと並行して足袋商人たちは、共同で資金を出し合って郵便小包、電信、電報、馬車鉄道、電話、電気など、他に先んじてまちのインフラの整備を進めました。明治 32 年(1889)明治 7 年に武士から足袋商人に転身した牧野鉄弥太氏は明治 32 年以降 3 棟の“足袋蔵”を建設するなど「牧野本店」



は商売を拡大して行きました。そして、行田の足袋産業は、日清戦争による海軍からの艦上足袋、日露戦争による陸軍からわらじ掛け足袋を大量受注するなど、軍需品受注をバネに大きく生産を伸ばしていきました。

明治時代の足袋蔵エピソード③

明治 37 年～38 年(1904-1905)の日露戦争の好景気で軍用足袋を大量受注したことを契機に、足袋工場建設ブームが到来。この時代は軍用足袋を大量受注したことを契機に、足袋工場建設ブームが起こり店や住宅の裏の馬の世話をしていた空き地に工場が次々に建てられました。それと共に足袋を保管しておく足袋蔵も多く建てられるようになりました。

明治 39 年(1906)日露戦争後の不景気

仕事が欲しがっていた職人に造らせた栗原代八商店の足袋蔵「栗代蔵」。この蔵を建設した栗原代八商店は文化 5 年(1808)創業の老舗足袋商店で、江戸時代は「松沢屋」と呼ばれていました。「小町足袋」「旗印足袋」の商標で手広く商売を営み、すぐ近くに工場があり、敷地内にも数棟の足袋蔵が立ち並んでいました。

明治 42 年(1909)には電話が開通。明治 43 年にはミシンの電動化により生産の飛躍的に伸びていきました。生産額が増えると、製品(出荷が本格化する秋まで)をしまっておく倉庫“足袋蔵”が必要になり既存の土蔵の転用とともに、明治 32 年ごろから足袋蔵が敷地内に数多く建てられるようになり、こうして短棚形の敷地に表から店舗・住宅、中庭、工場、足袋蔵、敷地稲荷が列状に並び行田の足袋商店の典型的建築配置が形成されました。保泉商店は足袋原料商として明治 35 年に創業し、明治 42 年に明治後半に建てられたと思われる土蔵(前蔵)を買ってこの場所に移転しました。「保泉蔵」はその典型例です。



その一方で、明治 42 年には「橋本喜助商店」が郊外に行田最初のノコギリ屋根の大規模工場を建設し、足袋工場の大規模化と、郊外進出が始まります。さらに、明治 43 年には「草生蔵」は石蔵も存在しています。

足袋蔵の建設が本格化する明治 30 年代頃までは、純和風の土蔵が建てられていましたが、明治時代末頃からは土蔵の小屋組みに洋風建築技術が導入され、土蔵だけ 洋風建築技術が導入された大型の土蔵でなく石蔵も建てられるようになりました。



明治 45 年には「行田足袋研究会」が発足し、若手が中心に電動ミシンの導入推進、縫製工程の改善、足袋の宣伝等の活動を行っている。

以上、明治時代の足袋

明治時代 <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/009.pdf>

明治棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/103.pdf>

工場棟上げ <http://hifu-koworks.com/gyoda.tabinet.ver12/contents/104.pdf>